Vol.65-No.03　　2013 年 6 月

阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

5 月例会 (5 月 26 日開催) 報告

「使徒言行録の学び」(第 9 回)　　大村　栄 牧師

―新約聖書　使徒言行録　第 9 章―

左から講演中の大村牧師、司会の寺嶋兄、荻原信友会長

例年の事ではありますが、この時期の気候の変化には正直言って困惑します。昨日夏日になったかと思うと今日は長袖でも過ごせるというような、温度変化の激しい日々が繰り返されます。どうぞ体調管理にお気をつけ下さい。そしてぜひ例会にもご出席ください。皆で元気になりましょう！

「聖霊行伝をたどる―使徒言行録の学び」―第 9 章―　　大村　栄 牧師

4 月例会では、ステファノの殉教を受けて、エルサレムでキリスト教の大迫害が起こり、これを逃れたフィリポなどヘレニストたちが周辺地域に拡散して行き、散らされた先でキリストの福音を述べ伝え、キリスト教への迫害が反ってキリスト教の全世界への拡散につながっていったことを学びました。

サウロの回心

第 9 章の冒頭では、サウロがキリスト者への迫害、殺害などに意気込み、大祭司長にダマスコの諸会堂にキリスト者の連行を求める文書の発行を依頼します。「サウロ」はヘブライ語のユダヤ名で、「パウロ」はギリシャ語による呼名です。聖霊降臨後のキリスト教の炎は燎原の火のように広がり、保守的なファリサイ派に属するサウロは、その沈静化に躍起となり、北方のダマスコへ向かいます。3 節から主の呼びかけを受けるシーンが語られます。ダマスコ途上で、突然天からの光が彼の周りを照らし、サウロは地に倒れます。そして、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」との呼びかけを聞き、「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、「私は、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべき事が知らされる。」サウロは起き上がったが何も見えず、3 日間目が見えず、食べも飲みもしませんでした。

(次ページへ)

★　信友会 2013 年度修養会　★

日　時：　8 月 9 日(金) 14:30 ～ 10 日(土) 17:00

会　場：　ナザレ修女会・エピファニー館

修養会テーマ　：「世の光」

教会標語「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」のみ言葉と共に、日々の生活を振り返りつつ、『光』について語り合い、交わりを深めましょう。

写真は 2012 年修養会

部分参加も可能です。7 月 14 日（日）までに（荻原、寺嶋、日高）あてに参加申し込みをしてください。

（前ページより）

サウロがここで「主よ、あなたは」と聞きますが、これは一般的な尊称で、イエスとは認識していなかったでしょう。そして大切なことは、イエスが「なぜ私を迫害するか」と言ったことです。「私の僕を」と言わなかったのです。イエスは、迫害される者たちと一体となり、共にいてくださり、最後まで支えてくださるのです。殉教者で思い起こすのは、秀吉の時代の長崎での 26 聖人、アウシュヴィッツでのコルベ神父、ディートリッヒ・ボンヘッファーなどを思い浮かびますが、彼らもキリストが側におられ支えてくださったと思います。そして、イエスはサウロを厳しく裁くのではなく赦して、役割を与えて派遣すると言われます。異邦人伝道という新たな使命を与えて派遣されるのです。これが本当の赦しです。私たちには、こんな私でも赦されているのかという自責の念がありますが、赦され新しい使命が与えられることにより、本当の償いの機会を受ける安心を与えられます。

マタイによる福音書 18 章 21 節以下に、「仲間を赦さない家来」のたとえがあり、ある王が、家来たちに貸した金の決済の時に返済できなかった家来の借金を帳消しにして赦したところ、家来は帰って自分に借金をしていた仲間に返済を迫りできなかったので牢に入れたのです。神は怒って彼を牢役人に引き渡します。　かつて、アメリカ映画に「Pay Forward」がありました。神さまから与えられた賜物を、神さまにお返しする「Pay Back」ではなく、それを他の人に与えてゆくという内容で、それによって赦しと派遣の連鎖がおきています。

アナニアの見た幻と役割

10 節からは、主の弟子であったアナニアが幻の中で主の声を聞き、直線通りにあるユダの家に行き、サウロと言うタルソス出身の者を訪ねて目を見えるようにすることが命ぜられます。ヘレニストで迫害から逃れてきたアナニアは、サウロの悪名を知っており、「主よ、わたしはその人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか聞いています。ここでも、御名を呼び求める人を捕らえる権限を持っています。」と反論します。そこで主は、「行け、あの者は、異邦人や王たちまたイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、私が選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、私は彼に示そう」。アナニアは、命ぜられた通りユダの家に行き、サウロの上に手を置いて、「兄弟サウル、あなたがここに来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元通り目が見えるようになり、聖霊が満たされるようにと私をお遣わしになったのです」。するとたちまち目から「うろこ」のようなものが落ち、サウロは見えるようになります。「目からうろこ」の格言はこの箇所から来ています。アナニアにとっては、この役割を受けることには不本意であり、「なぜ私が」とつぶやく心中が察せられます。しかし神は、徹底的に神に逆らったサウロを異邦人への福音伝道のための器として選び、アナニアを用いてサウロを目覚めさせ洗礼を授ける大切な役割を担わせるなど、人間的には到底理解できない神の配剤を思わせられます。目をさましたサウロは、食事を取り元気を取り戻します。

サウロは、数日後にはダマスコの弟子たちと共にあちこちの会堂で「この人こそ神の子である」とイエスのことを述べ伝えました。しかし、人々はこれを見て、「あれはエルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また彼らを縛り上げて祭司長たちに連行するのではないか」と疑いを持ち、サウロの熱心さにうろたえます。さらにはサウロを殺そうとして見張っていたので、彼は城壁から籠でつり下ろされて脱出して、使徒たちに会うためエルサレムに向かいます。

サウロ、エルサレムで使徒たち会う

２６節からは、サウロがエルサレムに着き弟子の仲間に加わる次第が書かれます。サウロのこれまでの行動を知る弟子たちは、イエスの弟子だとは信じません。そこでバルナバがサウロについて説明し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教したことを説明します。これも、過去の罪状からとても仲間として受け難いサウロについて、神はバルナバを用いて使徒たちとの仲介をさせています。それによってサウロは、エルサレムの使徒たちと自由に行き来し、ギリシャ語を話すユダヤ人と語り、議論しますが、サウロを殺そうとする勢力があることを知って、出身地のタルソスへ遣れます。これにより、キリスト教は、使徒たちのエルサレムからユダヤ、ガリラヤ、サマリアへと拡がりました。

32 節からは、ペトロの伝道についての記述が始まります。彼は方々を巡って伝道します。リダでは 8 年間中風で床についていたアイネアという人をイエスの名によって癒します。ヤッファでは、婦人で弟子の一人であったタビタが亡くなり、ペトロをリダから連れてきてタビタを生き返らせます。ペトロの伝道は、一人一人に親しく働きかける伝道を、サウロは沢山の人々に語りかける伝道を行いました。二人の偉大な伝道者がそれぞれの方法で伝道しました。教会もこの両面の福音伝道を行いたいものです。

ジョン・ウェスレーの回心

９章では、サウロの回心というキリスト教の大転換について学びました。英語でＣｏｎｖｅｒｓｉｏｎはひっくり返ると言う意味合いです。この「回心」ではジョン・ウェスレーを忘れてはなりません。ウェスレーはメソジスト派の開祖で阿佐ヶ谷教会もこの流れをくみます。1738 年 5 月 24 日はウェスレーの回心記念日です。この年の３日前の日曜日も今年と同様にペンテコステでした。

夕方、気が進まなかったようですがロンドンのアルダスゲート街にあるモラヴィア派の集会に出ることにします。集会ではマルチン・ルターの「ロマ書のための序文」が読まれており、９時１５分頃にルターの、信仰とは何であり、そして信仰のみが人を義とするという記事あたりを聞いている時に回心が起こります。本人の日誌に『キリストへの信仰を通して神が心に及ぼして下さる変化について述べられている間、私は私の心が不思議にあたたまるのを覚えた。キリストを心から信じていることを覚えたのであった。キリストが私のような者の罪さえ取り去り、罪と死の法則から私を救って下さるのである。』彼は弟チャールス等と神を賛美しました。ウェスレーの回心でも、キリストにのみ救いがあり、このような私でも無条件に赦され、その喜びを他の人に告げ広めるという派遣が与えられたのです。

回心は、仏教用語では「エシン」と読まれ、心の内側の分裂状態を整えること。「悟道」、「安心」（あんじん）も同義語です。キリスト教では単に悟りや安心のような心の中の出来事で終わらずに、必然的に他者へ向う遠心力を持っています。内側から方向転換して外にむかってゆかなければなりません。
キリスト教の転換点になった使徒言行録第９章の、パウロが神の声を聞いて回心し、すぐさまキリストの福音を述べ伝える伝道者として用いられえたダマスコ郊外での出来事を。ペトロの一人一人に向き合い、寄り添って福音を述べ伝える伝道を。そして、１７３８年のウェスレーによる「キリストにのみ救いがある」という赦しの確信を得たアルダスゲートでの回心の出来事を、これからも覚えてゆきたいものです。　（文責：玉澤武之）

使徒行伝の作者ルカとは？　＊使徒言行録＊ちょっと復習＊

ルカは１世紀半ばにギリシャ人の上流家庭に育った初期キリスト教の一信徒でした。《ルカによる福音書》及び《使徒行伝》の著者と言われ、また医者でもあり（コロサイ人の信徒への手紙４章14節）画家でもあったといわれています。

ここではまず画家であったことに注目します。図はオランダの初期フランドル派のファン・デル・ウェイデンの作品で「聖母を描く聖ルカ」です。マリアに抱かれた幼子イエスを描いているのがルカですが、ここに描かれているルカは実は作者の自画像のようです。ルカは絵が得意で集まった人々に絵をかいて福音を述べ伝えたとも言われています。

〈左の部分拡大〉

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書のなかでも特にルカ福音書は絵画的であると言われますが、パウロとは異なった世界の捉え方をしていて、その伝道旅行に同行したのでしょうか？

ルカが医者であったことも驚きです。当時の医者の役割は単に病を治すことのほかにもいろいろあったのだと思います。また医者がどういう技術や知識をもっていたのだろうかというのも関心があります。「聖路加国際病院」の名前は「そうだったのか！」とはたと気付きました。まだまだ続く使徒行伝の解き明しに期待いたします。